

鈴木ひでる(薬学者、1888—1944)「石炭女子」初の薬学博士に

東京大学男女共同参画オフィス特任教授・女性研究者支援コーディネーター 都河 明子

鈴木ひでるは、丹下ウメの後輩である。日本女子大学卒業後、大学で化学担当の助手として学生の実験指導などをこなしながら独学で薬剤師試験に合格、東京大学医学部薬学科の専攻生となった。

化粧をせず木綿の着物を無造作に着ている彼女に聞いた東大でのあだ名が「石炭女史」だった。目白の日本女子大と東大を往復しながら男性でも音を上げるような研究を黙々とこなし、女性で初の薬学博士となった。研究一途のひとであった。

一 生い立ち—日本女子大学へ

鈴木ひでるは、一八八八(明治二十一年)愛知県の塩間屋に八人兄弟の次女として生まれた。父は多趣味で向学心が強く、子どもたちには「人に迷惑がからないならなんでもやりなさい」と言っていたという。娘が何人も女学校に通ったことは大変珍しい時代であった。

ひでるは名古屋のミッシヨンスクールから新設の豊橋高等女学校に転校し、一九〇六(明治三十九)年日本女子大学普通予科に入学、翌年教育学部一部(物理・化学・数学)に進学した。

ひでるは、卒業後恩師長井長義化学教授(東京帝国大学医科薬学教授)の助手として母校に残り、学生の実験指導や雑務をこなしながら、独学で文部省中等教員化学科検定及び薬剤師試験に合格するなど学問一筋の年月を過ごしている。ひでるは、学校では物理と化学を選択していたが、当時保井コノと黒田チカが理学の博士号をすでに取得していたので薬学を選んだようだ。また、化学で学校を出ても世間に通じる資格がないとのこと、文部省中等教員化学科検定の資格や薬剤師の資格を得ている。

なお、恩師長井長義は、明治時代における日本の薬学の進展に寄与した人である(丹下ウメの章参照)。日本女子大学は創立六年後「香雪化学館」を創設したが、長井はここに

当時では最新のドイツ式実験設備を整えた。この化学館から丹下ウメとひでるが第一号生として生まれている。香雪化学館はひでるとして一番心の休まる大切な場所であった。夜通し実験を行っていたようで、家に帰らないときは妹の香代が夕食と夜食を届けたという。この化学館には大きな火鉢があり、これを囲んで学生たちと四方山話や人生相談などを話したようだ。ひでるは学生たちの良きメンターであったろう。

二 東京大学医学部薬学科の専攻生に

大正十年、母校の附属高等女学校教諭を兼務しながら、長井の推薦により東京帝国大学医学部薬学科で異例の女子専科生として近藤平三郎教授の指導を受ける機会を得た。東大薬学教室で、ひでるは「レモンデゾ揮発油成分ペリレンの構造」の研究に没頭した。

レモンデゾ(紫蘇)は野生で、牧野富三郎博士が発見したものである。秋の初めに花が

咲き、種子がつく。葉も種子もレモンの匂いがし、茎は紫蘇特有の四角い形をしているという。

牧野博士は「日本の植物学の父」と言われ、多数の新種を発見・命名するなど近代植物分類学の権威で、「牧野日本植物図鑑」等多数の著作を発行している。牧野博士が東大の学生を連れて植物採集に出かけた際には、ひでるも同行したようだ。レモン紫蘇は高尾山と九州などに生息するだけで、実験に使用するには大量必要なため、ひでるは、まず栽培し品種改良から始めたという。そして、レモン紫蘇の種子から抽出した成分ペリレンを結晶化し、今まで未知であった構造式を決定した。実験は厳しいもので、男性でも音を上げるような仕事も黙々とこなし、夜学でドイツ語を学び、実験のノートはすべてドイツ語で書いたという。地味な着物、ひつつめ髪、化粧のない顔、実験用のかっぽう着姿の彼女に聞いたあだ名が「石炭女史」だった。一九二九年には日本女子大学家政学部の化学教授となっている。

三 女性で初の薬学博士に

ひでるは、目白の女子大と東大とを往復しながら研究を続け、「レモンデゾ揮発油成分ペリレンの構造」研究で一九二七(昭和十二)年東京帝国大学より女性初の薬学博士号を取得した。日本女子大学にとっても最初の博士である。

日本女子大学同窓会桜楓会の機関紙である「家庭週報」(一一三四号—一九三七)で、ひでるは研究資料であるレモン紫蘇の種子の回収の大きさを述べている。また、同紙一三三三

五号では、ひでるの薬学博士号授与を祝う会に記載している。「先づ井上校長から記念の花瓶がひでるに贈呈され、出席全員は拍手をもつて之を祝した。井上校長は今回学位を得られたことは本校最初で、薬学の名誉ある人を出したことは全校全国に拡がる喜びと祝はれ、ここに忘れてならない人は成瀬仁蔵先生(日本女子大の創設者)、長井長義先生であり今日は定めし霊界に於て両先生がお喜び下さって居るような気がいたします。又どうか今日のような祝賀の会がつづいて出来る様にと願われた。最後に鈴木ひでる氏は謙遜な態度で指導を受けた教授、先輩、その他知友会員方に今日の会を感謝され、研究経過を報告、尚今後女性として科学的知識の欠けたところを自分としては化学を通して教育事業に専心たづなばりたいと希まれた」とある。この会で「有終」と刻まれた木彫りの額を贈られたそうで、ひでるは大層大事にしていたという。

四 戦争中、そして肺炎に

ひでるの研究は戦争前に完成していた。戦争が激しくなると、学校も学校工場になり、ひでるは防毒マスクの研究をし、また、防空

壕の中の湿度がちょうどよいとエノキダケを栽培していたようだ。この頃、ひでるは「自分もだんだん歳をとってきて、仕事も一区切りできたし、皆さんの世話にもなった。これからはご恩返しをしなくてはならない、それに勉強させてあげることだ」と、学生や助手に「勉強なさい。勉強なさい」と言っていたという。

ひでるは、先輩の丹下ウメを尊敬し敬愛していた。一九四四(昭和十九)年十二月空襲が激しくなってきた頃、丹下ウメが突然肺炎にかかった。ひでるは非常に憂慮し自宅での療養が無理であると分かると、保証人となり東京帝国大学分院に入院させた。そのお蔭かウメは三週間ほどで無事退院した。しかし、数日後、糖尿病であったひでるが発熱してしまった。あいに空襲はますます激しくなり、あつけないく五十六歳で亡くなった。努力、まじめ、研究一筋の人であり、日本女子大学の香雪化学館での研究に青春の日々を賭けた人生であった。

ちなみに、ひでるが薬学博士を授与されることになったというニュースが掲載されている昭和十一年十二月の家庭週報には、米国のヘレン・ケラーが十二年四月に来日する予定であるとのニュースが掲載されている。

(参考文献)
鈴木ひでる「薬学一筋の姉 鈴木ひでる」日本女子大学・成瀬記念館 No.8 (一九九二)